親の死と子どもの親権
――シェイクスピアを社会の合わせ鏡にして

石井　美樹子

ハムレットは、エルシノア城を訪れた旅役者たちにむかって演劇論をぶつ。

「劇というものは、いわば、自然にむかって鏡をかかげること。善は善なるままに、悪は悪なるままに、そのまことの姿を取りだし、時代の様相を浮かびあがらせる。……」

中世の慣習や伝統を受けついだイギリス・ルネッサンス時代における親子の問題を考証しながら、シェイクスピア劇がどのように時代の様相を浮かびあがらせているかをみてゆきたい。

いのちがけの出産

中世・ルネッサンスをとおして、妊娠と出産にかんする慣習や知識は女性の領域と考えられ、男性があずかり知

ることのできない領域だった。男性が産室にはいることは禁じられていた。正規のまたは民間の産婆だけが、出産に関する知識を持っていた。その知識はかなり限られたものであった。難産になったとしても、産婆の取りえる方法は、神の加護を祈る以外に、ほどんどなかった。帝王切開は、妊婦が出産の途中に死亡したときにのみ許されていた。子宮収縮促進薬、鉗子の使用、会陰切開といった簡単な手当てさえ知られておらず、難産や出産、出産後の併発症で死亡する妊婦は非常に多かった。特に、初産で死亡する女性の数はきわめて多く、生まれようとする子どもの頭が産道に詰まっただけで、子も母も死亡した。出産に際しては、神のお慈悲にすがるほか道はなく、妊婦は分娩に恐怖を抱いていた。

庶民とはくらべものにならないほど恵まれた環境のなかで生きていた王侯貴族の女性たちでさえ、出産はいのちがけの大事業であった。死産・流産の数は、庶民の場合より多かったかもしれない。子を自分の乳で育てることはせず、乳母に育てさせた慣習が悲劇に拍車をかけた。授乳すれば、次の妊娠はかなり遅くなる。次の妊娠とのあいだに開きがあればあるほど、母体は健康を回復し、死産・流産の比率は低くなる。授乳の慣習のない王侯貴族の既婚女性たちはたえまなく妊娠し、命を縮めた。

ヘンリー八世の三番目の妃となったジェーン・シーモアは懐妊すると、ハンプトン・コートに引きこもり大事をとり、出産に備えたが、産は難をきわめた。

母子ともにいのちが危ぶまれ、侍医はヘンリー八世に「いざとなりましたら、お妃のお命を救いましょうか。それとも、お子のお命を救いましょうか」とたずねた。

ヘンリーは「なんとしてでも子の命を救え。妃のかわりはいくらでもいる」と答えたという。

当時は、新生児と母親のいのちのいずれかを選ばなければならなくなったら、子どもよりは母親の命を優先するのが原則であった。ヘンリーはこれを無視したのである。

ジェーンは三人目の妃であったが、ヘンリーはいまだに男子の世継ぎをえておらず、ジェーンが男子を産むことを切望していた。母親の命より子の命を救えと侍医に命令するヘンリーのことばには、一日も早く世継ぎをえたいという張りつめた気持ちが感じられるが、王妃を取り替え引き替えした君主ならではの台詞であろう。

初産の場合はとくに、妊婦の死亡率が高かった。ジェーン・シーモアは、ヘンリーの待望していた男子（のちのエドワード六世）を産んだが、産後の併発症のために、王子を生んでから十二日後にこときれた。このとき、ジェーンは二七歳くらいであった。

ヘンリー八世の最後の王妃キャサリン・パーは二度の結婚歴があり、いずれの場合も懐妊しなかった。ヘンリーの妻になってからも懐妊しなかったが、ヘンリーの死後、海軍卿トマス・シーモアに嫁ぐやいなや懐妊する。トマス・シーモアはジェーン・シーモアの兄にあたる。このときのキャサリン王妃は三六歳。高年初産である。キャサリンは月が経つにつれ、疲れやすくなり、黒い輪が目のまわりを縁取るようになった。経過が順調でないので侍医たちは心配した。やはり、難産だった。苦しみぬいたあげく、キャサリンは女の子を出産する。母子とも無事であった。しかし、キャサリンは出産からわずか六日後に息をひきとった。

エリザベス一世が結婚を躊躇した理由のひとつは、出産に伴う恐怖であった。ようやく手に入れた王冠だった。産褥の床で死にでもしたら、イギリスを統治する夢は破れ、国は混乱する。姉メアリーは三七歳という年令でスペインのフェリペ（のちのフェリペ二世）と結婚し、イギリスをスペインの属国扱いにされる屈辱に甘んじたばかり

でなく、二度までも想像妊娠し、周囲を騒がせた。結婚に熱意を示さぬ夫との結婚生活、イギリスに腰を落ち着けることのない夫にこころを痛め、メアリーは命を縮めた。メアリーの悲惨な結婚生活は、エリザベスの結婚に関する幻想を打ちくだいた。と同時に、女王が結婚することのむずかしさを痛感したであろう。

シェイクスピアの『ペリクリーズ』には、出産でいのちをおとす王妃セーザが登場する。セーザは夫ペリクリーズとともに船に乗り、夫の故郷にむかう途中、嵐にあい、産気づいて女の子を産みおとすが、すぐに息を引きとる。船に死人を乗せていては嵐が静まらないと船乗りたちに抗議され、ペリクリーズは王妃を棺におさめて海に流す。この場面に、当時の観客は王妃ジェーン・シーモアやキャサリン・パーの姿を重ねたのではないだろうか。身分の高低を問わず、妊婦の死は深刻な社会問題だったのだ。

セーザは仮死状態で棺に納められたとみえ、棺が流れついた島で医師の治療によって生きかえり、最後には別れた娘と再会する。

継母

母親の死亡率が高かったために、父の後添えの継母に育てられる子どもたちが多かった。継母が未亡人だった場合には、子連れで再婚することもあった。継母とうまくゆかなかった子どもたちも多かったであろう。子と継母の対立の物語は『シンデレラ』や『白雪姫』などのメルヘンに限らない。そこには実社会が反映されている。悪い継母ばかりでなく、よい継母も実際にはいた。

たとえば、チューダー王家の子どもたちは、結婚を繰り返す父ヘンリー八世に翻弄され、家庭というものを知らずに育った。父がキャサリン・パーと結婚してはじめて、子どもたちは家庭の暖かさと慈しみを知った。キャサリンは子どもを生んだ経験はないが、子育ての経験はあった。ヘンリーの妻になるまえに、キャサリンは二度結婚している。一七歳で最初の夫と結婚したが、死別した。二〇歳で四〇歳になるラティマー卿ジョン・ネヴィルと再婚した。ジョンはすでに二人の妻を亡くし、先の結婚で息子と娘をひとりづつもうけていた。キャサリンは大貴族の館のきりもりと、子どもたちの世話にあけくれた。継娘マーガレットは継母キャサリンについてこう記している。

「すばらしい教育を授けてくださり、優しく愛してくださいました。そして、みちあふれるばかりの慈愛を注いでくださいました。お義母様には大変なご恩を感じています。」(1)

シェイクスピアの『ペリクリーズ』と『シンベリン』には、悪い継母が登場する。

妃セーザを失ったペリクリーズはタルソに立ちより、タルソの大守夫妻にマリーナを預け、養育を頼む。タルソの大守夫妻にも娘が一人いた。マリーナは成長するにつれ美しさを増し、きだてもよかったのでタルソの人びとの賛美のまとになる。そのために、タルソの大守夫妻の娘の影が薄くなった。大守夫妻はマリーナに嫉妬する。大守の妻は召し使いに命じて、マリーナを殺害させる。召し使いがマリーナを海岸に連れ出し、殺害しようとしたとき、海賊があらわれ、マリーナを連れ去る。マリーナは海賊たちにより売春宿に売りとばされ、苦難艱難の末に、父と再会し、死んだと思っていた母も生きていることがわかり、再会する。

『ペリクリーズ』は、シェイクスピア版『白雪姫』だ。『白雪姫』でも、継母の王妃は狩人に命じて、白雪姫を殺害しようとする。狩人は白雪姫を森に連れてゆくが、優しく美しい姫を殺害することはできず、動物を殺して、そ

の内臓を王妃に見せ、姫を殺した証拠とする。

『シンベリン』では、王妃を亡くしたブリテン王シンベリンは新しい王妃をむかえる。新しい王妃には連れ子がいた。シンベリン王は一人娘イモージェンを王妃の連れ子クロートンとめあわせようとする。だが、イモージェンは愚かで粗野なクロートンを嫌い、貧しい紳士を夫に選ぶ。王は身分違いの結婚もはなはだしいと激怒し、イモージェンの夫を追放し、イモージェンを監禁する。娘の結婚相手は父が決める時代であった。王妃は監禁されたイモージェンにいう。

王妃　イモージェン、安心なさい、わたしは決して、
　世間で悪くいわれるような継母根性を出して
　おまえに意地悪はしませんから。（一幕二場）

継母の王妃は親切を装ってイモージェンを安心させ、そのいっぽうで王の娘にたいする怒りを煽り、親子の間を引き裂き、イモージェンを宮廷から追い出す。

幼な妻、幼い母

ジェーン・シーモアは二七歳で、キャサリン・パーは三七歳ではじめて懐妊したが、ふたりの場合は例外で、平

均して、初産の年令は低かった。女性の結婚年令は低く、特に上流階級の女性ほど政略結婚で他家に嫁ぐために、結婚年令は低かった。一二、三歳で嫁ぎ、母になるという例は少なくなかった。歴代の王妃の結婚と出産の年代を列挙する。

ヘンリー三世（在位一二一六―一二七二年）の妃、プロヴァンス伯爵の娘エレアノールが輿入れしたときは、一一歳であった。エレアノールは一四歳前後でのちのエドワード一世を生んでいる。その後、四男三女を生む。

エドワード一世（在位一二七二―一三〇七年）の妃、カスティリア王女エレアノールも一〇歳前後で結婚した。ふたりのあいだには十六人の子どもが生まれたといわれている。皇太子エドワード（のちのエドワード二世）は四番目の男子である。

エドワード二世（在位一三〇七―一三二七年）の妃、フランス王女イザベラは一五歳で結婚、二男二女を生んだ。

エドワード三世（在位一三二七―一三七七年）の妃、エノー伯爵の娘フィリッパは一四歳で結婚、七男五女に恵まれた。

これらの王妃たちは少女のような年令で結婚したが、幾人もの子どもに恵まれた。幼くして結婚、そして出産したために、生殖機能に変調をきたし、その後は子どもに恵まれない女性も多かった。ヘンリー七世の母マーガレット・ボウフォートはその典型的な例である。

父を亡くした子の親権と後見人

マーガレット・ボウフォートは、エドワード三世の四男、ランカスター公爵ジョン・オブ・ゴーントと三番目の妃キャサリン・スウインフィールドの曾孫にあたる。ジョンとキャサリンの子どもたちが生まれたとき、ふたりは正式に結婚していなかったので、子どもたちは庶子扱いをされ、王位継承から外された。長男はフランスの持ち城の名にちなみボウフォート家を興す。

マーガレットの父がボウフォート家の後継ぎだったので、一人娘のマーガレットは父の死後、ボウフォート家の跡取り娘となる。

父が亡くなったとき、マーガレットはまだゆりかごのなかに横たわる幼な子だった。父はいまわの際で、王の許しをえて、妻に娘を託した。当時は、父親が亡くなると、親権が自動的に母親に移ることにはならなかった。貴族の場合、たとえ母親であっても、わが子の親権者となるには国王の許可が必要であった。

ヘンリー六世はマーガレットの父が亡くなるやいなや、約束を反古にして、マーガレットをサッフォーク公爵ウィリアム・ド・ラ・ポールに養育させた。後見人の変更は政治的なものであった。

ウィリアム・ド・ラ・ポールは、一四四五年にイギリスがフランスと結んだ停戦条約、トゥールの平和条約の締結に功績があった。この功績にむくいるために、ヘンリー六世はウィリアム・ド・ラ・ポールをマーガレットの後見人としたのである。マーガレットの後見人になることで、ウィリアム・ド・ラ・ポールは、マーガレットが受け継いだボウフォート家の莫大な財産からあがる収入を懐に入れることができる。財産家の後継ぎ娘や息子の後見人

になることは、じつに旨味のあるビジネスだったのだ。後見人庁長官は実入りのよい役職で、代々、君主の懐刀ともいうべき側近にあたえられた。ウィリアム・ド・ラ・ポールは富裕なマーガレットを公爵家につなぎとめておくために、マーガレットを後継ぎ息子ジョン・ド・ラ・ポールと結婚させた。このときマーガレットは七歳、ジョンも七歳だった。三年後に、この結婚はヘンリー六世の命令によって解消される。

次にマーガレットは、ジャスパー・チューダーとエドモンド・チューダー兄弟の被後見人となる。ヘンリー五世亡きあと、王妃キャサリンはオーエン・チューダーと密かに再婚し、ジャスパーとエドモンドをもうけた。したがって、ジャスパーとエドモンドはヘンリー六世の異父弟にあたる。ヘンリー六世はふたりの弟にマーガレットを預けることにより、弟たちの経済的な基盤を確保したのである。

一四五三年、ヘンリー六世はマーガレットとエドモンド・チューダーを結婚させ、マーガレットの財産をエドモンドとジャスパーのあいだで分割させた。領地をもたぬ二人の異父弟にたいするヘンリー六世の思いやりであった。このときマーガレットは一〇歳であった。一四五五年夏、マーガレットとエドモンドは、父方の故郷の南ウェールズに旅をした。この旅で、マーガレットは懐妊する。マーガレットは一二歳。母になるには幼なすぎた。

エドモンドはヘンリー六世の代理としてウェールズ地帯に睨みをきかせていたが、その最中の一四五六年八月、ヨーク公爵の一味の者につかまってしまう。ヨーク公爵は着々と足場をかため、ランカスターのヘンリー六世から王位を奪う機会をうかがっていた。ヘンリー六世の異父弟エドモンドは、早めに摘みとっておかなければならない危険な若枝だった。ヨーク公爵には都合のよいことに、エドモンドは、獄中で赤痢にかかり死亡する。

一四五七年一月二八日、マーガレットは難産のすえに男の子を出産する。のちのヘンリー七世の誕生である。マー

ガレットはその後、二度結婚するが、一度も懐妊することはなかった。一二歳という若さで出産したために、生殖機能に支障をきたしたと思われる。懐妊しなかったから、産褥の床で死ぬこともなかった。一度目と二度目の結婚で、子を産まずに夫と死別したために、父の遺産に加えて、二人の夫の財産を受け継ぎ、マーガレットはイギリスで一、二を争う金持ちの貴婦人となる。マーガレットの莫大な資産がのちに、息子ヘンリー・チューダーにチューダー王朝を誕生させる経済的な基盤となった。

早すぎる再婚

さて、ヘンリーを出産した翌月、マーガレットは夫の弟ジャスパーに付き添われて、ウェールズのグウエントのニューポート近くのバッキンガム公爵の館を訪れた。一三歳になる公爵の次男ヘンリー・スタッフォードとの結婚の可能性をさぐるためだった。

寡婦となったマーガレットは、自分と子どもの身を守り、財産を守るために、一日も早く実力者の後楯を必要としていた。富裕なマーガレットがひとりでいることは危険であった。いつなんどき、誘拐されるかわからない。また、国王が意にそまぬ結婚を押しつけてくる可能性もあった。

マーガレットのように、富裕な寡婦が再婚を急ぐのはめずらしいことではなかった。夫と死別した女性は、涙の乾くまもなく、新しい夫をむかえるのが慣習であった。夫という保護者を持たぬ女性が社会で占める場所はない。一五四七年一月にヘンリー八世と死別したキャサリン王妃は、その年の五月にトマス・シーモアと結婚している。

ヘンリー八世時代の一流の人文主義者で法律家のトマス・モアの父ジョンは、一六歳のときに父を亡くした。母が再婚したために、ジョンは母方の祖母に育てられた。ジョンの妻アニエスは、トマス・モアをふくめて三男三女を生み、死亡、その後、ジョンは三回も結婚している。

トマス・モアはオックスフォードで法律の勉強を終えると、一五〇五年、二七歳のとき、一七歳になるジェーン・コレットと結婚した。ジェーンは、マーガレット、エリザベス、セシリア、ジョンと四人の子をたてつづけに生み、六年後に二三歳の若さで亡くなった。四人の幼い子を抱えたトマスは、妻の死から一か月後に、未亡人アリス・ミドルトンと再婚した。アリスは前夫とのあいだにもうけたアリスという名の女の子を連れて、トマス・モアに嫁いだ。

モア家では、トマスの四人の子どもとアリスのほかに、養女のマーガレット・ギグス、トマスの被後見人のアン・クレサクル、同じく被後見人のジャイルズ・ヘロンが育てられていた。マーガレット・ギグスの母親は、マーガレット・モアの乳母だったとされ[2]、亡くなるまぎわ、財産とともにマーガレットをトマスに託したのであった。のちに、トマスの娘セシリアはジャイルズ・ヘロンと結婚し、トマスの息子ジョンはアン・クレサクルと結婚した。トマス・モアやバッキンガム公爵のように、自分の息子や娘を被後見人と結婚させる人も多かった。むろん、このような結婚には、被後見人の財産を永久に取りこむ利点があった。

シェイクスピアの『ハムレット』では、ハムレット王子が、父の死後二か月たらずで母が再婚したことを気を病んでいる。母親であろうと父親であろうと、伴侶に死に別れたら、早々に再婚するのが普通であった。ハムレットのほんとうの苦しみの源は単に母の早すぎる再婚にあるのではない。デンマークの正式の王位継承者はハムレット

王子である。その王位を、母もろとも叔父に奪われてしまった。この異常な状況に、ハムレットの神経は高ぶっているのだ。

『夏の夜の夢』における被後見人をめぐる争い

シェイクスピアの『夏の夜の夢』には、当時の後見人と被後見人の関係を暗示する興味深い場面がある。

アテネ公爵シーシーウスはアマゾンの女王ヒポリタとの結婚を間近に控えている。この結婚を祝福するためにアテネにやってきた妖精の王オベロンと妖精の女王タイターニアは目下仲たがいの真っ最中。タイターニアがインドの王様から盗んで連れてきた可愛いお小姓をオベロンがほしがったのだが、タイターニアはそれを断った。タイターニアは花冠をかぶせたりしてお小姓をとても可愛がり、どうしても手放そうとしない。それで、オベロンとタイターニアは顔をあわせれば喧嘩をはじめるのだった。

妖精の王と女王の喧嘩は季節を狂わせ、さまざまなわざわいを人間界にもたらした。天変地異を正常な状態に戻すには、ふたりが仲たがいをやめるほかに道はない。

オベロンはタイターニアがお小姓をあきらめれば、すべてが丸くおさまると、しつこくお小姓を要求する。タイターニアには、お小姓を手放すつもりは毛頭ない。

ご安心なさい。

たとえ妖精の国を全部をもらっても、あの子だけは
手放しませんから。あの子の母親はわたしの信者だった。
スパイスの芳香薫るインドで、夜になると、わたしのそばにきて
おしゃべりをすることもしょっちゅうだった。
かと思うと、大海原の黄色い砂浜に並んですわり、
潮に乗って船出してゆく商船を見つけては、
その帆が、浮気な風をはらんで、おなかを
大きくされたのを見て笑ったこともある。
その格好のまねして、かわいい泳ぐような
足どりで――そのときはもうわたしのお小姓を宿して
大きなおなかをしていたけれど――陸地を行く帆船が、
商品をいっぱい積んで航海から帰ってくるように、
いろいろなものを拾い集めてわたしにくれたりした。
でもしょせんは人間、あの子のお産で死にました、
だから、あの子お育てるのもその母親のため、
あの子を手放さないのも、その母親のためなのです。（二幕一場）

タイターニアの台詞は、エリザベス時代の後見人制度を考えるうえで、興味深い。

インドの少年の母親は、エリザベス朝の多くの妊婦のように、彼を産むとすぐに亡くなった。インドの少年の母親はタイターニアの信者だった。帆が風をはらんで、大海原を行く商船が、懐妊した母親にたとえられ、お小姓を宿して大きなおなかをしている母親は、商品をいっぱい積んだ商船にたとえられている。信者の母親は、商品をいっぱい積んだ商船のように、タイターニアを物質的に豊かにした。タイターニアはいっている、あの子の母親は「いろいろなものを拾い集めてわたしにくれたりした」と。タイターニアにとり、母親を失ったインドの子どもの後見人になり、育てることは、物質的に割のあうビジネスだったのだ。少年の後見人になれば、さまざまな利益にあずかれる。だからこそ、「たとえ妖精の国を全部をもらっても、あの子だけは手放しませんから」と、オベロンに宣言するのである。

タイターニアとオベロンのインドの少年をめぐる喧嘩はただの痴話喧嘩ではない。少年の後見人の座をめぐる権力争いなのである。片親または両親が亡くなった子どもは、いわば金の卵を生む鶏のようなもの、保護者または後見人に富をもたらす。容易には手放すことのできない、法外な価値を持つ存在なのだ。

「スパイスの芳香薫るインド」や「商品をいっぱい積んで航海から帰ってくる帆船」のことばからは、大航海時代をむかえ、活気にあふれる一七世紀のイギリスの社会状況が伝わってくる。

結婚式を四日後にひかえ、もどかしさを募らせるシーシウスの台詞からも、当時の慣習が読みとれる。

シーシウス　楽しい日々をあと四日すごせば、

新月の宵となる。だが、なんともどかしいことか、
この古い月の欠けてゆくのが。わたしの望みをなかなか
かなえさせてくれぬ、継母や未亡人がいつまでも
生きながらえながらえて若者に譲るべき財産を朽ちさせるように。（一幕一場）

父親が後添えと子どもを残して死んだ場合、子どもが成人するまで財産の管理をしたのは継母であった。

父権制社会

女王を戴いていたとはいえ、エリザベス一世の時代は完璧なまでに父権社会であった。結婚相手は父親が決めた。それに背くことはほとんどできなかった。

『夏の夜の夢』のイージーアスは娘ハーミアをディミートリアスに嫁がせたいと考えているが、ハーミアはライサンダーを愛しており、父親のいうことを聞き入れない。困りはてたイージーアスはアテネ公爵シーシウスに訴える。

イージーアス　もし娘がディミートリアスとの結婚に同意しないときは、
古くからのアテネの特権をわたしにお許しください。

娘はわたしのものですから、わたしに処分させてください。
つまり、このような場合にあきらかに適用される
アテネの法律に従って、娘にはこの若者か
それとも死か、いずれかを選ばせたいと思います。（一幕一場）

シーシウスはこう答える。

シーシウス　どうだな、ハーミア？　よく考えるのだぞ、
おまえにとって、おまえの父親はいわば神だ。

『夏の夜の夢』は父権社会を背景にしている。親が決めた結婚に反すれば、死罪になるか修道院に閉じこめられ、うまずめの生涯をおくらなければならなくなる。しかし、このようなおきてをハーミアはきっぱりと拒む。ハーミアは社会慣習から自分を解き放つ硬派のフェミニストだ。

ハーミア　処女としての特権を
好きでもない夫に捧げ、いやいやながらその頸木に
わたしの魂をかけられたまま生涯をすごすよりも

死んだほうがましです。

ハーミアとライサンダーは恋を成就するために、駆け落ちをする。ライサンダーがハーミアを連れてたよってゆこうとしているのは叔母であった。

ライサンダー　ぼくには一人の
叔母がいる、未亡人で、財産があって子どもはない。
このアテネから七マイルほどの田舎に住んでいて
ぼくをまるで一人息子のように思ってくれている。
そこに行けば、ハーミア、きみと結婚できるだろう。

ライサンダーには両親がおらず、未亡人の叔母の後見のもとにあるようだ。

『夏の夜の夢』の若者たちは、社会が押しつけてくる固定観念など意に介さず、女性たちは女性にまつわる慣習に縛られていない。芝居にこのような女性が登場するのは、とりもなおさず、観客がそのような問題に関心を寄せていることの証拠である。

平均寿命と死亡率

一七世紀初期のイギリスにおける平均寿命は、今よりずっと低かった。身分、職業、環境などによって異なるが、地域差もあった。ロンドン市民の平均寿命は二二歳と三か月、イングランドの北南地方は三六歳四か月、北中部地方は四九歳と一番長く[3]、ロンドンから離れるにつれて平均寿命は長くなっている。この数字から、一七世紀初期のロンドンの環境と衛生状況の悪さがわかる。ロンドンに生まれた四七パーセントの女性が二〇歳になるまで、父親に死に別れている。[4]人口の半分の三分の一が、結婚するまでに、父か母か、あるいは両親の死を経験している。

当時の結婚の危機は父母の不仲とか性格の不一致にあるのではなく、妻か夫かの不慮の死によって突如として崩れ去った。これは厳粛な事実であった。

エリザベス一世が即位した年の一五五八年から一五五九年にかけて、歴史上例がないほど死亡率が高かった。死亡率の高さを飢餓のせいにする歴史家もいるが一五五八年の収穫は比較的よく、一五五九年の収穫は前の年よりもよかった。長雨のために穀物が打撃を受けたのは、一五五六年と一五五七年であり、このときは飢えと困窮がイギリス全土をおおった。

一五五七年に、マラリアに似た新しいタイプのインフルエンザがあらわれ、蔓延した。翌年は、このインフルエンザに加えて、正体不明の発汗性の感冒が流行した。この感冒は当時、「スウエッティング・デジーズ」(sweating disease)と呼ばれており、チューダー朝のイギリスをしばしば襲った。ヘンリー八世の庶子ヘンリー・フィッツロイも、世継ぎエドワード六世もこの病で命を落した。破壊力は強力で、高熱に苦しめられ、全身から汗を吹きだ

して見るまに体力を消耗する。頑丈な者でさえも、二〇時間もちこたえることはむずかしい。生きのびたとしても、病はしばしばぶりかえし、二度目の打撃は致命的で、高熱で全身が焼きつくされた。チューダー家のお抱え年代記作者エドワード・ホールはこの病気の恐ろしさについてこう書いている。

「この病の魔の手に触れられたら、三時間、いや二時間の内に死の床に伏せる。楽しげに昼の食卓についていた人が、夕食時には死んでいる。」(5)

一五五八年の死亡率は異常なほど高かった。異常気候、暑くて湿度の高い夏、栄養不足、汚水、道路にあふれるなまゴミなどの要因がインフルエンザと発汗性の感冒とあいまって、多くの人を死神の手に渡したものと思われる。住民の一〇パーセントが死亡した。イギリスは一五六九年にも、同じ危機に見舞われる。このときに、親を失ったり、両親を失い孤児となった子どもは多かった。

欠陥家族と孤児

シェイクスピアの両親は、子どもたちが成人するまで生きたが、親を失った例は身近にいくらでもあった。シェイクスピアの母メアリー・アーデンは母に死に別れ、継母に育てられた。一五五九年、疫病が蔓延した年、シェイクスピアは叔父と叔母を失っている。叔父と叔母の一四歳になる娘は孤児となった。母メアリーが自分の境遇や継母についてシェイクスピアに語ってきかせたかどうかも、叔父の娘が孤児の境涯や心情をシェイクスピアに吐露したかもわからない。しかし、シェイクスピアは、親の死によって境遇が変わった子どもの姿を鋭い洞察力で観察し

ていたにちがいない。シェイクスピアの芝居に登場する家族は、すべて欠陥家族である。主人公は孤児や片親という境涯の人物が多い。

『リア王』のリアの家族は父親と娘三人で構成されている。母親はいない。姉たちは父親に愛される末娘コーディリアを嫉妬している。姉のゴネリルとリーガンは、隠居した父親を虐待する。リア王の物語と平行して進行するグロスター伯爵には二人の息子がいるが、一人は嫡子、もう一人は庶子。この家族も母親が不在である。庶子が嫡子に嫉妬と敵愾心を抱いていることから、伯爵の悲劇がはじまる。

マクベス夫人は子どもを産んだ経験があるようだが、夫妻には子どもがいない。デズデモーナは父にそむいてオセロと結婚し、悲劇への道をたどる。デズデモーナにも母がいない。『冬物語』の悲劇は王が王妃の貞節を疑うことから始まる。妻を信じることのできない夫は妻と王子を死に追いやり（王妃ハーマイオニはのちに生きていることがわかる）、生まれたばかりの女の子を臣下に捨てさせる。

『嵐』のミランダにも母がいない。父プロスペロは、弟にミラノ公爵の地位を奪われ、孤島に流された。『お気に召すまま』のヒロインのロザリンドにも母がいない。父の公爵は弟によって公爵の地位を剥奪され、追放された。ロザリンドは叔父の宮廷に暮らしている。叔父の娘シーリアとは大の仲良しである。シーリアにも母がいない。ふたりは宮廷を捨ててアーデンの森にむかう。

ロザリンドの恋人オーランドは兄オリヴァーから疎まれている。オリヴァー、ジェークイズ、オーランドの三兄弟はローランド・ド・ボイスの息子であるが、父母は亡くなり、長男オリヴァーが父の後を嗣いでいる。オリヴァーは父の遺言に従い、ジェークイズを大学に行かせている。オーランドにも教育を授けるようにというのが父の遺言

だったが、オリヴァーはそれを守らず、オーランドは兄に不満を抱いている。兄との確執から、弟は兄の屋敷を出て、アーデンの森にむかい、ロザリンドと再会する。

『終わりよければすべてよし』のロシリオンの若き伯爵バートラムは父を亡くし、フランス王の後見のもとにある。母の伯爵夫人は、フランス王のもとに旅立つバートラムとの別れを惜しんでこういう。

伯爵夫人　わが子を手放すのは、亡き夫をふたたび葬る思いです。

バートラム　わたしとて、母上、出て行くのは父上の死をもう一度悲しむ思いです。しかし、王のご命令にはつねに従わなければなりません。いまのわたしは陛下に後見されている身ですから。　（一幕一場）

夫を失った場合、妻が夫の責任をも引き受けて被後見人の子を養育する義務があった。伯爵夫人のもとには、伯爵家の侍医の一人娘ヘレナが身を寄せている。ヘレナは孤児、父の遺言により、伯爵夫人が引き取って世話をしている。ヘレナの父は名医であった。伯爵夫人はバートラムとの別れを惜しむヘレナの沈んだ様子から、ヘレナが息子を愛し、後を追ってパリに行きたがっていることを知る。フランス王は不治の病におかされていた。ヘレナはパリに行って、父から教えられた特別の処方でフランス王の病気を治してみせるという。伯爵夫人はヘレナの願いをかなえ、パリに送りだす。ヘレナの治療を受けた王はまたたくまに回復し、約束どおり、ヘレナに四人の独身貴族のなかから夫を選ばせる。四人の貴族のなかにバートラムが含まれていた。ヘレナはためらうことなくバートラムを選ぶ。

伯爵夫人がヘレナをパリに送り出す決意をしなかったら、ヘレナは想い人と結ばれることはできなかったであろう。伯爵夫人には、父親的な決断力と洞察力が備わっているといえる。

『ベニスの商人』のポーシャにも両親がいない。父はポーシャに莫大な遺産を残した。美しく富裕なポーシャを妻にしようと、世界中から求婚者が押し寄せている。しかし、ポーシャは結婚相手を自分の意志で決めることができない。

ポーシャ　わたしには好きな人を選ぶことも、嫌いな人を拒むこともできない。生きている娘の意志が死んでしまったお父様の遺言で縛られているのだもの。（一幕二場）

父の遺言というのは、金、銀、鉛の三つの箱のいずれかに隠された父のこころを選びあてた人が、ポーシャの花婿になるというものだった。ただしい箱にはポーシャの絵姿が入っていた。ポーシャの絵姿が入っている鉛の箱には「われを選ぶ者は、所有するすべてを投げうつべし」と刻まれていた。バッサーニオは外見の虚飾に惑わされることなく、もっともみすぼらしい鉛の箱を選んだ。

「われを選ぶ者は、所有するすべてを投げうつべし」という銘には、ポーシャの結婚観が反映されている。どんな危険をおかしても妻に献身する夫こそ、ポーシャが探し求める男性だった。ポーシャの父は娘の願いを知っていた。だからこそ、死ぬ前に、箱選びによる花婿選びを準備したのであった。娘の結婚相手は父が決めるという父権を主張しながら、娘の願いにも応えてやる。そこからは、父権制のなかの理想的な父親像が浮かびあがってくる。

父親であっても、母親であっても、死を覚悟したとき、子どもの行く末を案じるのは自然の人情である。ポーシャは、父の賢明な配慮で幸せを掴む。ヘレナの場合も、父の遺産の特別な治癒力でフランス王の病を治療し、想い人を夫にする。

親の死によって子どもは打撃を受けた。親の死が身近なできごとであったことから、後見人制度が生まれた。後見人制度の精神は、孤児ヘレナの幸せを願って後押しをする『終わりよければすべてよし』の伯爵夫人に見られるような、博愛主義に富むものであるべきであろうが、しばしば利益をもたらすビジネスとして利用された。ときとして、政治の手段にも利用された。キャサリン・パーの夫、海軍卿トマス・シーモアはジェーン・グレイの後見人になり、甥エドワード六世とジェーンを結婚させ、最高実力者になろうと試みた。トマスの野望は挫かれ、処刑された。このような後見には危険が伴った。

ハムレットは「劇というものは、いわば、自然にむかった鏡をかかげること」と語る。シェイクスピアの作品にはいたるところに当時の人びとの心情や慣習やらが反映され、それが劇の核心となっている。とくに、女性と結婚、家庭に関する扱いかたには、時代が色濃く出ており、ときには古い慣行に修正を迫る態度も見られる。

注：

(1) E. E. Reynolds, *Margaret Roper: Eldest Daughter of St. Thomas More* (London: Burns & Oates, 1960), p.10.

(2) *The Complete Peerage*, 13 Vols., reproduced edition, 1982, VII, p.484, note a., quoted in *The Six Wives of Henry VIII* by Antonia Fraser (London: Wedenfield & Nicholson), p. 365.

(3) V. B. Eliot, "Single Women in London Marraige Market," in *Marriage and Society: Studies in the Social History of Marriage*, ed. R. B. Outwaite (New York: St. Martin's), 1981, p. 90.

(4) Ibid., p. 90

(5) Edward Hall, *Chronicles* (edn. London, 1806), p. 592.

シェイクスピアのテキストはアーデン版を使用した。